



里見八犬傳 拾七編 卷四十三

709
94



門 13
 號 709
 卷 94



明治三十八年
 十月九日
 購求

南總里見八犬傳第九輯卷之四十二下

東都 曲亭主人編次

第百七十回

神變と操りて伏姫猶子の初陣と華やまを
 舊君の調へて信乃父祖の忠義と詳ふを

是より先小犬塚信乃成孝杉倉武者直元及大江親兵衛仁義ハ新參
 義士政本大金孝嗣並石龜次國大越鯉之向水五十三大枝獨鉗素吉
 須々利壇五郎二西的寄舎五郎若の義士と其徒さへち合せて隊の若ヨク
 從へく十二月八日下晡小岡山の陣營小かへる程小義通君の自家勝軍の
 時東六郎辰相が薦め稟上より之岡の陣營を鳥山真人以下老
 煉の士卒一千有餘と留り成りて既園府臺の城へ還らせぬと噂をり
 信乃若の徑を前所河を舫渡りて其臺の城小歸陣を隨即東辰相小就く

八犬傳九輯卷四十二下

大塚堂藏

上せて みるべきに 寄隊の皆敗績あり。迹多し落亡せし。政本孝嗣が義侠勤軍戦功あり。大江親兵衛が歸東武功拔萃あり。並小姥雪代四郎直塚紀三六潜地喜勘太老が武勇の挿あり。又二四的寄舎五郎須々利壇五郎が忠戦の功あり。大江親兵衛が意見あり。神授の靈丹を施して自家の士卒は之敵と見ても忠死の者の死と起し生かして降せし。請ふ者は是を留め本貫小かり去す。願ふ者の饒して放ち遣はせし。但し待我の佞臣横堀在村新織素仍の信乃射斃され時士民が其首を捕り。齋せし積悪天罰あり。又大飼現八が猶殘燼を鎮ん為小權且假名町不在陣あり。又真間井樫二郎姥雪代四郎直塚紀三六潜地喜勘太の或の施某の頭人を奉り。或の施某の裁領あり。猶昨今の戦場不在勤あり。今朝も寄隊の三将再戦の時那野猪六十五頭又忽焉と見れず。自家と援け。寄隊を敗り。出沒不測の功あり。漏れ

つひまう 上。おどろか 信乃親 兵衛並小直元喬梁政木孝嗣さ召よせ。對面ありけり。その他大飼現八田税逸友も尚假名町の陣中不在あり。又泪乾鳥も古内美容の深瘡を負ふ。臥てあゝ城内不在あり。親兵衛が來ぬ及びて又神某の奇效あり。巫小愈ることあり。只古内のまらむと橋小義通の從軍なる者の瘡を負へ。比自親兵衛が神某也。一人も恙なくけり。又次國太卿三十三大素吉吉の義侠といへも町人へ又直塚紀三六潜地喜勘太の再臣あり。又須々利壇五郎二四的寄舎五郎の他極の野武士あり。亦俱小功あり。防衛使及隊長等も必同列するべきと。是若の次の日大飼現八田税逸友姥雪代四郎等も交り來て義通君小拜見の後。另小比目口出されて功を答ふ。此のひけり。間話休題。その宵義通君の犬塚信乃大江親兵衛杉倉武者助

継橋綿四郎政木大全を召よせ。而茶の礼を賜ふ。東六郎執達。給侍中七浦六郎朝夷三弥白濱七郎七侍り。當下義通信乃親兵衛大全等。軍功を譽言さる。うち譚ひあふ。是軍功の首也。今日齋藤兵衛太郎を生拘り。當城へあらせ。是軍功の首也。今日又寄隊の副將上杉五郎憲房を擒し。岡の陣營へ牽せし。其勲功全く現八ふ。似し。然りけれども。信乃が火猪の謀を以て。寄隊の戦車を焼く。あらざる。今日の全勝と云ふ。有はれ。其軍功を正副伯仲せし。是亦似る。くもあらぬ。咱等も二大士と直元逸友等。閉戦を援んと。曩岡山より出陣せり。途に長尾景春の二隊。勅兵小撞見し。閉戦難義及び折思ひ。あつた。政木大全が親兵衛と交遊の義。あはれ。他も代らんと。同憂同宿の義士。次團太卿。

五十二大素も吉と。の者と共に。其徒六七十を従ふ。突然と。援け。まを那鋒尖を折けども。尚勝負を分ざり。一幸ひ。親兵衛が京都より。かゝる多。伴當親兵衛新参の義士。俱に數十名。城めり。援て。一瞬間。那勅敵と殺顔。一戦走り。刺景春の愛子と。少え。長尾為景と。擒り。當城へ進らせ。我面を。起。這大功。信乃現八。拮掉。といま。孰を伯と。孰を仲とせん。只感悦の外。あら。年。倍。利。詞。稱。辰相。是。執合。て。御。畏。美。り。ひ。抑。三。大。才。幹。武。勇。の。左。右。の。ふ。む。の。ひ。も。就。中。大。江。仁。が。殺。伐。攻。戦。の。場。干。て。仁。慈。の。心。を。喪。つ。敵。小。施。某。の。一。條。の。宋。裏。の。仁。似。れ。も。武。を。り。て。人。を。征。する。者。を。威。勢。必。長。久。さ。る。と。徳。を。り。て。人。を。征。する。者。の。十。世。の。後。も。川。流。あ。る。と。和。せ。ま。る。と。是。館。の。御。本。意。を。親。兵。衛。が。く。仕。ぬ。と。言。ふ。と。親。兵。

衛推禁めて。御家老仁を差殺るるを以て。錦の御盛徳ハ格別ニ臣等ハ
今日まで今日兼り。御軍令ハ従ふの。細人の威勢あるハ敢忌憚るところ。
懲りて新ハ做すあらずの争ひ已と死るる候べしと思ふ。その所行るに辭
あを信乃ハ諾るひく。其言愚意も相似ら。辟言ハ那靈猪の如死ハ牙ハ焦
火を結着され。戦車と焼死ハ然るるとも。其折一頭も火ハ死
又敵も捷殺され。征方も知ざる。ける亦再戦の折。頭れ出。自家
援けて敵の騎馬を馳け。又馳破りて。撥消を如く見えざる。ゆえ意ハ
この奇事ハ。則當家を守り。伏姫神の真助を。猛死獸のい。あ。ら。
信乃。其靈猪の。り。も。又一層の奇事あり。六郎具ハ告む。や。と仰。辰相

阿と応て膝を找め。談者。犬塚大江自餘の人々。所ハ。一。郎。君。岡。山。上。り。御。歸。城。の。談。定。り。既。出。ん。と。あ。る。程。怪。む。一。箇。の。野。猪。
大。は。積。み。た。一。箇。の。武。者。の。鎧。の。表。帯。と。牙。引。掛。け。背。に。載。て。走。る。と。
飛。鳥。の。如。く。岡。を。登。り。郎。君。の。御。馬。前。に。あ。り。し。伴。の。衆。兵。吐。嗟。と。騷。
ゆ。防。に。林。示。ん。と。せ。程。野。猪。の。背。に。武。者。を。控。と。振。隊。半。て。走。り。往。
方。ハ。知。ざ。る。あ。る。未。曾。有。の。奇。事。な。ら。ば。咱。等。則。雜。兵。小。件。の。武。者。を。
杖。起。さ。せ。と。見。る。大。將。口。の。人。る。べ。し。戎。衣。都。て。綺。羅。穿。ぎ。既。半。
生。羊。死。老。在。り。ハ。某。と。與。勅。せ。且。其。姓。名。來。歷。を。鞫。問。さ。る。其。武。
者。の。い。ふ。事。を。聞。く。則。寄。隊。の。大。將。之。辭。我。の。左。兵。衛。督。成。氏。之。衛。衛。自。家。
敗。軍。の。折。鈍。も。暴。猪。小。馬。を。仆。さ。れ。て。身。も。馳。ら。れ。と。思。ひ。の。ま。へ。へ。お。ろ。
末。め。を。覚。え。喜。ぶ。不。這。里。ハ。敵。陣。を。ん。命。運。の。傾。く。所。今。也。免。る。不。路。

あむ。左も右もせられ。と陳ドあり。嗚呼。則答ふ。御推量の如く。這
地方の岡山の陣營。目今義通歸城の折。御心易く思召ね。寡君
義成の仁人。父祖の舊交。御命及ぶ。もあむ。先國府臺の
城へ俱し。卒ぬ。と慰め。を儘馬お掛け。乗せ。士卒。守
せ。當城内へ俱して。則一室。屏籠て。番士を置。守らせ。獨那君
の。大飼犬。江が橋。當城内へ。憲房主あり。為景。撫
子あり。又那齋藤盛実あり。も。隊長。各檻室。異。衛士
。附置。城内。賓客。是。和殿。柄。愛。あむ。と
告る。感。親兵衛。直元。驚。且。呆。且。歎。び。答。る。原
來。折成氏主。靈野猪。駈。岡山へ。去。れ。秋臣。の。闘。戦
。稍。克。敵。を。漏。さ。思。ひ。然。る。光景。を見。され。知。む。と。と

むら。悟。る。由。當。下。信。乃。の。謹。る。辰。相。お。答。る。今。會。て。美
。那。靈。猪。の。掙。に。実。お。奇。中。の。一。大。奇。事。あ。て。人。の。よ。く。做。ら。ぬ。あ。ら。初
。臣。の。前。河。を。渡。り。寄。隊。を。逆。て。戦。ひ。も。成。氏。主。の。一。隊。あ。
。直。元。逸。友。を。の。相。向。い。せ。臣。の。一。つ。び。前。を。飛。し。鋒。を。交。へ。其。故
。如何。と。那。君。の。臣。が。大。父。大。塚。匠。作。の。主。筋。あ。り。父。番。作。も。當。初。其
。餘。祿。と。成。長。れ。り。又。義。兄。弟。大。飼。現。八。が。為。あ。是。現。在。の。故。主。今。の
。恩。仇。地。を。易。く。雙。言。敵。の。思。ひ。と。せ。る。も。只。君。命。を。の。倡。て。鋒。を。交。へ。前。を
。飛。し。戦。ひ。克。て。或。生。拘。り。或。其。首。を。捕。ら。人。其。是。を。何。と。の。ん。君。子。の
。忍。び。さ。し。所。る。れ。正。人。の。憎。る。べ。の。故。今。日。の。再。戦。も。臣。の。真。實。同。井
。秋。季。を。お。顕。定。主。と。挑。む。戦。ひ。現。八。も。亦。繼。橋。喬。梁。と。副。と。憲。房
。主。と。戦。ふ。却。成。氏。主。の。一。隊。杉。倉。と。田。税。を。指。向。す。二。面。俱。し。戦。克

去の靈猪の援ふよりてり。介るふかの折直元逸友兩個をり成氏王と擒ふ
 せむ臣等が做まあわねども臣等防御の正使や。其軍配の外なきを則
 臣等が隊配るれば五十歩百歩の差池あるを臣等が擒ふ做せり同様の
 故に神明地靈那靈猪とて成氏王を駈馳せて岡山を御陣へ餽り
 りく郎君の御ふ入れ。今回郎君初陣の御ふ柄ふ做されり臣等が故王を
 擒ふま云悪名をいむるやと今とを悟れ其奇其妙凡智小量知られ
 や。必是伏姫神の神通廣大申て物不馮ぬ真助不疑ひる係べ。と思ふ
 由疎ふひめと心の誠うち出さ言細や解論せば義通感悦のさうもあを
 況や辰相直元孝嗣等の説れて思旋らせ信乃が誠心始と忘れを裏中
 飽まも情さす。那君とて怨むる理義分明る高論の人の惑ひを醒
 まふ足れり。あも學問の力なそと感嘆まれ親兵衛も有理々然心と

點頭く。危言とを稱へける然義通凱陣の後あのみを殿君義成
 主告ぬいぐ義成則箭祈河原を麻利支天神へ堂料五十貫
 文を寄布まぬひ。且其堂内伏姫神の神跡木主を置くこと許さ
 べ。と制度せらる是ふより。麻利支天の別當西妙並初那野猪六十
 五頭と虚舟より援陞して養置ける莊客の米錢許多賜り。皆困
 恩を拜戴し。欽するのり。あは是後の話へ却説の宵國府其
 る城内の信乃が云云と議し稟を程小夜深し。親兵衛則
 計ひ稟し。政木大全の苦戦の疲労あらん疾息室へ退り。睡ふ就べ
 こそ。身の暇を賜ひ。案内者等孝嗣と俱して外面へ退出けり。登時信
 乃は又辰相等と談する中。あ地の大敵皆散落して。稍静悄ふ。無と
 明日の夙めく急遽脚の使者。洲崎の御陣へまわきて。先きの義を告まる

て且那里の御安危を伺ひなむとぞあるべし。但し仍徳口を防禦使莊
 小文吾のいささや先他等仰合されば不便をゆめ。と議されば亦
 親兵衛も俱よのち。臣等の京師より御使を果し來と。稲村へ進
 ざれども御高信乃よ傳達せられて防禦使たるべし。の合命を奉り且御
 大刀さへ賜りしが寄敵の地不在し程の閉戦を援けしむべし。寄敵
 既の退くる猶當城の掩留せざるに似く不忠なるべし。と議論を辰
 相うちて二天士の意見見其理あり然らば行徳への振照俱教二を遣し
 那里の安危を問まべし。又洲崎の御陣へ継橋綿四郎をまわらせ。その地の
 勝軍を汪進せん大江生へ従来の親兵衛二名をめて。歸東の義を生口な
 せて寄敵弥在らば做る。その折稻村へ参るともいふ。邊はあはるべし
 と議されば二天士の意見不儘せり。直元と共侶の退りて連署の汪進林を

筆東を寫せる。既にして曉天ふりし時候振照俱教二弘経の義通君れ
 命より。親兵衛名を領て仍徳口を大川大田が陣營不赴たり。那里
 より壯小文吾の使として満呂再太郎信重と安西就介景重が隊の
 兵を船に快船ふち乗ら。暴河を流り來て大川大田が勝軍の告文
 と信乃現八へ與る書状を呈上。是より。這再太郎の満呂復五郎
 重時の養嗣たる者。又就介の安西出來が獨子たるは。よ
 知られて那里の閉戦。壯小文吾。千番景自胤と大石憲重原胤久を
 橋ある。胤久の深痕。命危たり。告文に載る。且再太郎就介
 が口状ゆく。具しければ東辰相軟び答ふ。這兩個の少年を見参入を
 去る。義通則再太郎就介。牽出物を賜り。則這里より。方僅
 振照弘経を遣せり。若們が還らざる以前。這方より。知るべし。只

上の館へ注進をいそぐべし。と仰合さる。身の暇を賜ひけり。その時大江
 親兵衛の那里の刀瘡見よと嘆く。則神茶一盒を社小文吾の
 餓り遣せし。那隊の士卒の重瘡の如く原流久の如く必死の命。死する事
 急遽脚の使を来り。洲崎の陣營へ赴けり。有任り。程五十三太素
 る吉の次園太卿と名ると俱不見参の礼果て西園河原へ退ると請ひ。義
 通固く留めぬ。他門の只氣を使ひ任使を磨く。武士の志を
 欲りせむ。熟する活業もいへ。枉身身の暇を賜るべし。願ひ稟まふ。親兵
 衛孝嗣も是を禁る。術るたより。とす。上へ。則五十三太素も。士言六
 十名。當坐の賞禄を多く賜り。異日稲村より。刀に。必す。あ。べ。し。
 と仰らる。その時亦孝嗣も。意衷を陳て。既。大江。代。ら。ま。く。欲。り。あ。志。の

果し。今。大江。の。か。ら。ま。て。且。寄。敵。落。亡。し。れば。その。地。所。用。る。身。不
 る。向。水。們。と。共。侶。不。退。る。べ。し。と。し。を。親。兵。衛。何。で。不。饒。ま。義。通。君
 由。其。言。と。傳。へ。て。放。ち。ぬ。べ。く。も。あ。ら。ず。管。待。の。く。厚。ら。け。れば。孝。嗣。今。あ。ら。ず。
 辭。い。稟。さん。の。さ。ま。が。あ。ら。ず。只。得。次。園。太。卿。と。名。と。俱。當。城。不。留。り。介
 程。不。大。飼。現。八。寄。隊。敗。軍。の。往。方。と。穿。鑿。果。して。田。税。逸。友。と。俱。不
 假。名。町。を。退。陣。あ。て。當。城。へ。か。ら。ま。ぬ。程。不。箭。斫。河。を。思。ひ。け。る。水。路。の
 敵。將。扇。谷。式。部。少。輔。朝。寧。の。水。死。を。甦。生。ら。せ。て。更。み。擒。不。ぬ。る。う。の
 既。不。上。不。見。を。る。如。し。現。八。及。力。助。逸。友。等。敵。將。足。利。成。氏。を。靈。野
 猪。が。駈。逐。し。て。義。通。君。の。初。陣。の。華。不。做。せ。と。公。奇。談。不。胆。を。淡。ら。相
 賀。して。逸。友。と。共。侶。不。義。通。君。不。見。参。ま。又。真。間。井。樅。二。郎。姥。雪。代。四
 郎。直。塚。紀。三。六。漕。地。喜。勘。太。等。の。神。茶。施。行。の。事。果。て。その。日。の。暁。合。ふ

かり多ふけれハ親兵衛ハ明日の早天ハ代四郎以下の毎と孝嗣次園太
 卿ニ寄舎五郎壇五郎との黨ニ相伴ひく。安房へ還す欲は徳
 遠ハ折られハ親兵衛が京師まであり。又歸路の義通君も
 辰相中も告る不具る所あり。事ハ觸てハ少知る者あり。然るも信乃
 等が少づる隨ハ義通君ハ告宣せり。人咸これを知るる。奇異ハ驚
 武勇と譽てり。茶話中もあつて。問話休題ハ程ハ信乃親兵衛ハ
 敵といへども生口の敗將隊長を侮り卑め。義通君ハ少え上て其款侍ハ
 等困る。敬言固の士卒と傲め。を饒さず。現ハ共侶ハ
 三四室る。園固を看輪り。憲房為景盛実等と問慰る。憲房
 為景と羞く頭を拾け。衣うち被せ。陽睡して居り。又成氏の身違ハ
 造る。是ハ亦敬言固の士卒うち圍れ。燈燭の下る。烟の上ハ坐して。

又き頭を低く在り。當下信乃現ハ親兵衛ハ鎖を衛子等ハ啓せ。俱ハ
 檻室の内ハ找入。額衝ハ拜して安否と諮へ。成氏の敬馬は。と解
 急ハ礼を返して和殿等ハ是誰と問ふ。問れて信乃ハ膝を找めて。敬
 答る。早も忘れさる。彼臣等ハ則生人る。君が兄ハ御坐せ。春王君
 安王君ハ小傳りける。武藏園豊嶋郡の人民大塚匠作二成ハ孫大塚
 番作一成ハ獨子。大塚信乃金成考。考てハ。信乃。信乃。言故ハ。

往時嘉吉の擾乱ハ結城十萬の義兵ニ檢を歴る。竟ハ折。勢
 竭。兩公達の敵ハ為。俘囚と做り玉ひ。折臣等ハ大父三成ハ殺。出
 猶戰。陣殺を。と口碑ハ傳へ。當時番作十八歳ハ送。割
 重圍を殺脱。像見の名ハ村兩丸を腰ハ帶り。兩公達の去向ハ情地ハ跟
 美濃の壘井ハ至る程ハ痛。一。兩公達の金蓮寺ハ御事。

番作ばんさく其御終そのごしゆう寫なを見るみるま治ち堪かんむま奮ふん然ぜんとと跳はりり出いづい創はつつててのの武ぶ士しとと只ただ
 一ひと刀た小こ斫さつつししてて兩りゆう公こう達たつのの脚けつ首しゆ級きゆうをを奪うふふ辛くるくくしてして其その勢せいのの敵てきとと殺ころすす
 脱だつくく信しん濃のう路ろふふ来きよよけれればば路ちう備びふふ道だう場じやうふふ兩りゆう公こう達たつのの脚けつ首しゆ級きゆうをを情じやう地ちふふ
 瘞しやうめめのの母ぼののぬぬ介けるるふふ當たう晚ばん番ばん作さくのの宿しゆくとと投なげげりり草さう庵あんををくくるる東とうとと喚わん做さくをを
 少せう女にょ小こ逢ほうぬぬ開かいのの結けつ髮はつ友ゆうのの妻さいををくく其その父ちちもも亦また結けつ城じやうをを匠じやう作さくとと俱く俱く陣じん致ちすす
 母ぼ三さん早さうくく世よをを去さりり所しよ寓いるる身みのの今いま也や天てん縁えんのの熟じやく寺じをを所しよ遂すい不ふ捨しゃ
 不ふ忍にんびびをを則すなはちち是こゝ臣しん等たうとと母ぼ入い折せりり父ちちのの金きん蓮れん寺じでで受うけけるる痛いた痛いた不ふ堪かんむま
 洗せん麻まふふ赴しゆ死し湯たう治ちしてして稍しやう刀たう瘡さうのの愈いふふ是こゝもも是こゝよりより行ぎやう歩ふ自じ由ゆうにに夫おつと
 婦ふ相さう推すい乃のてて辛くるくくとと故こゝ御ごるる武ぶ藏ざうのの大だい塚づかふふかかのの妻さい是こゝよりより氏うぢをを改かへめめりり大だい
 塚づかとと喚わん做さくしてして兵へい法ぽう武ぶ藝ぎをを御ご黨たう不ふ教けうへへ年ねんとと歷れきるる隨ずい臣しん等たうとと生なまゆゆひひ
 ぬぬ幸さいるる死しのの只ただ是こゝのの事ことをを母ぼのの臣しん等たうがが六む七しち歳さいのの比ひ舊きう病びやう重じゆうりりてて身み故こりり死し

父ちちもも年ねん末まつ多た病びやうりり一ひと則すなはちち父ちちのの姉あね婿むこるる大だい塚づか墓ぼ六むとと喚わん做さくせせ細さい人じんをを
 則すなはちち大だい塚づかのの御ごのの莊じやう官くわんありり其その心こゝろ術じゆつ便べん僻へきありり且かつ我われ父ちちのの姉あね龜かめ條じょうもも同どう思しややりり
 憑たもりりくくむむ父ちちのの年ねん末まつ秘ひ藏ざうせせるる村むら雨う丸まるのの名な刀たうをを言いふふ假かり托たくけけ術じゆつととりり奪うふふ
 命いのち長ながくくとと覺かく期きありり一ひと夕ゆふ臣しん等たう父ちち祖そのの忠ちゆう義ぎとと村むら雨うのの大だい
 刀たうのの傳でん來らいをを説せつ示しせせとと右みぎのの如ごとくく汝なんぢ成な長ながりり一ひと時とき澁しぶ我われのの脚けつ所じよへへ參まゐりりてて這こ
 名な刀たうとと献けんりり且かつ其その大だい刀たうのの傳でん來らいとと父ちち祖そのの忠ちゆう義ぎとと夢ゆめええ上うてて仕し官くわんをを願ねがひひなな
 れれとと教しるる詞ことばのの露つゆるるてて光ひかり玉たまをを抜ぬきき腹はら極ごく斫さくをを俯うつせせりりぬぬぬぬのの時とき臣しん
 等たうらら十じゆ二に歳さい親おやのの送おくり訓おん不ふ從じやうありり馬うま心こゝろりりぬぬ伯おやじ母ぼ丈ぢやう婦ふ許ゆる養やしなむむるる堪かん
 ぬぬ死し難がた苦くるをを忍しのぶぶ年ねんとと歷れきるる身みのの稍しやう成な長ながりり一ひと今いま茲こゝよりより六む七しち歳さい以もつ前ぜん文ぶん明めい
 十じゆ年ねん夏なつ月つきのの時とき候う臣しん等たう澁しぶ我われ不ふ赴しゆ死し湯たう治ちしてして隨ずい即すなはちち脚けつ所じよ不ふ伺かぎ候う村むら雨うのの大だい



八代傳九郎卷四下

十一

大塚



成氏捨おかりく
 夜三犬士不吊
 慰めらる

八代傳九郎卷四下

大塚

刀を進ら母小猶思慮足らざりて其名刀ハ牙人小拔易られと悟らる
然ハ横堀在村が質物へと看破りて一言羊句も分説を聴ぎ反々
臣等を隣國の間謀見るべいと。猛居其の力士の課。横捕せん
欲せく臣等勢ハ已もるを緝捕の力士を殺拂ひて芳流閣と喚做
たる高樓の屋上の攀登りて脱れ去ま欲せ程小御内の力士大飼見ハ
が登り來ぬる組打して両失脚も滾落く閣下る河邊在りける船ハ
受られ纜断離れて身の氣絶して在り程船ハ急湍ハ推流さるる行
徳の浦小富り一と當日地方の豪傑大田小文五親子小救れ死さる
とどゆれとも。濟我あ受る刀傷の破傷風做り一六身の病臥く
古那屋在り古那屋ハ則小文五の親文五兵衛が歇店の跡入折々横堀
在村が沙汰とて御内の侍新織帆大丈素仍が臣等と緝捕の頭人を奉

アと。親兵を多く従へて仍徳へ来て突撃入り一六臣等が窮死逼迫て免
るべしもあざり一と小文吾が妹夫這果ゆる大江親兵衛が父入ける義
士山林房ハ其妻共侶身を殺去。其鮮血をりて臣等が瘼ハ濺り
く。奇某の效行心。我破傷風亟小愈て身の口ハ恙る死とゆるのこ
ら。房ハが面影のよ。臣等小肖る小より。小文吾則其首とりて新織帆
大丈を欺死還て。再厄遂小解けこれ義兄弟と共侶小持歷浮浪六個
年と麻止る程小臣等ハ因果の義兄弟俱小大をり。唐字小做者ハ
人るべ死すも知れ且未生以前より里見殿小宿因あり。家臣小るべ死す
悟れも。其時至る。今茲の夏四月の時候君臣の天縁竟ハ熟
あ。皆共侶小安房へ徴れ。龍遇特小浅く。恁而這回の閉戦小臣等と
大飼現ハ義義通の隊小隸られて。則這地の防衛使。聊螳臂を抗

よる連勝して這田地に至れり。遂莫微功誇んとて家の賤譜を宣示す。

 あらむ只父祖の忠魂義胆と御聴入れんとす。言辯及びひた其將六日

 昔蒲るべく十日の菊ふ似れども。折をりて先人の志を告る。折の不孝

 るんと思ひより。言憚りるくひた。心の誠うち出さ言爽小説果てをう後

 方と見え久る。身を退く其坐を譲れ。現八やと膝を找めて成氏王の

 向ひ額衝て且告る。臣等素是微賤の小卒。徳瀨立ひつゝ御視

 徹を饒されん。然るを咫尺をり。名生口る鳥。濟ふいとも本貫へ上總

 武藏の豊嶋大塚の氓。糠介が獨子なり。と極祿の中

 上御内の走卒。犬飼見兵衛。小養れて。藩我の藩中。成長りひひ養

 父没して。卑職を嗣。則犬飼見八と喚れ。一霎時の程。今も里

 見の防衛使。大飼現八。金碗信。道をい入。臣等貴藩不在。一日

兵員を。卑職を。君も仕へ。私る。忠義を。盡す。不至り。禄の。

 少と職の。尊卑。依る。くも。是を。鬚。歳。初。師を。擇。

 勵。兵法。七書。弓馬。劍術。緝捕。白打。至る。まで。学。び。む。と。

 けれども。御内の。家宰。横堀。史。在。村。能。と。媚。を。賢。を。奉。け。む。及。て。臣。等。

 乞。求。る。と。る。を。憎。む。職。を。轉。て。獄。吏。に。做。し。臣。等。の。牢。獄。の。小。吏。と。

 其。情。願。ふ。あ。ら。ざ。れ。ば。屢。辭。ひ。ゆ。り。と。在。村。不。敬。の。罪。と。誣。て。臣。等。を。牢。獄。に

 致。せ。る。者。ま。う。り。久。在。村。則。計。以。稟。し。臣。等。を。獄。舎。より。饒。し。出。せ。件。の

 緝。捕。を。課。し。臣。等。則。芳。流。閣。上。の。機。奉。登。り。組。打。の。顛。末。目。今。信

 乃。が。口。状。不。具。然。に。折。氣。絶。して。筋。竹。徳。へ。流。れ。來。り。我。不。復。り。て。由。來。と

 問。ふ。信。乃。の。疎。忽。の。失。ある。と。捕。捕。ら。る。罪。不。あ。り。且。臣。等。が。実。父。糠

衆の則信乃と同御も信乃を紹从の事簡也。奇遇ハ又只これの事也。
 信乃と臣等ハ宿因也。異姓の弟兄也。死徴ハ迷ハ身の内ハ痣あり。
 形牡丹の花ハ似たり。又感得の靈玉あり。小文五口と親兵衛も同因因果の
 痣あり。玉あり。八人ハ死を中。あの日この時小文五等と四人相逢也。信乃
 信乃ハ信乃ハ罪を犯者ハ必擲捕るべし。然バとて臣等只一人阿容
 阿容とて許我へ還らバ又其罪を誅せられ。必在村がら死ん進退
 維谷りぬ。故信乃と俱ハ躲れて徳の古那屋ハ居り。是より浮浪
 六稔と歴々。義兄弟等と共召れて安房へ参り。ハ亦信乃が口
 状ハ具ハ薄情也。君ハ只在村が奸虐私論の証言也。信容ハ意哀ハ
 り。今も猶信乃と臣等と憎しとの思ハ召せ。信乃と臣等ハ意哀ハ
 まう。是非如恩仇地を易く。今君命ハ依るとの事。昔君故王と敵と

逆て箭を飛ハ鋒を舞ハ死と争ハ本意ハあは。故ハ始より君が一隊の御陣
 ハ杉倉武者助直元田税力助逸友をの指指向。信乃と臣等ハ頭定親子此隊
 と戦ハ不料ハ靈猪の援也。君ハ敗軍の時臨モ駈ハ背ハうち駈せ。我ハ公
 義通の陣学不致。神明佛陀の冥助也。信乃と臣等ハ始と志ハ胡馬の
 北風燕鵲南枝の心を監とあひけん。一大奇事也。成氏ハ之羞て連
 兵額ハ汗也。答ハ及ハ信乃ハ慰也。君知ハ召れ。君ハ御ハ横堀在
 村と新織素紗の御陣の敗也。見也。二騎連立て落亡せ。底不知野の邊也。
 臣等ハ射て斃ハ然也。地方の莊客ハ其首ハ斬りて來て。実檢ハ入れハ
 免官君ハ這回の軍令ハ只當の敵と戦と許して敵の首ハ捕る者ハ功と賞。
 然も在村素紗ハ俱ハ死首を土民ハ捕りて軍門ハ鼻り。八年來君を惑
 えて。賢を害ハ民を虐ハ。家ハ富ハ。天罰ハ。解れて成氏嘆息して。

頭末皆金玉不異る。我不明也。始より和郎等の賢良英才を思
 へて。鄰國の宝不做。悔へ楚懷の憂愛。同鳥の頭。白くも生て。待我
 へ還りか。けん賞期の既。不究ゆる。と。文をて。嗟歎。堪ざりけり。登時。大江親兵衛。我
 と。か。拜。て。公。を。殿。さ。る。る。歎。せ。ぬ。ひ。を。臣。等。も。里。見。の。防。禦。使。る。大江親兵
 衛。仁。不。竹。の。言。自。負。不。似。て。公。も。寡。君。義。成。が。仁。義。の。家。風。相。從。我。們。ま。ま。

父祖の上まへち出て云云と稟を。只其忠義の心操を知せんと思ふの
 又。そ。見。参。ま。げ。れ。と。告。別。多。外。面。ち。連。立。退。出。け。り。あ。の。時。左。右。の。檻。室。に
 在。る。憲。房。為。景。盛。実。を。守。護。の。士。卒。不。至。る。ま。這。二。大。主。の。忠。孝。博。愛
 始。と。推。て。故。を。忘。れ。ぬ。真。面。目。は。是。さ。り。と。そ。感。服。せ。る。り。け。り。悠。而。大江親
 兵衛。の。の。宵。東。辰。相。不。意。哀。と。告。て。義。通。君。の。身。の。暇。と。請。ふ。程。を。真。真。開。并。秋
 本。號。雪。代。四。郎。直。塚。紀。二。六。漕。地。喜。勘。太。們。の。施。茶。の。果。て。ら。る。來。け。り。と。親
 兵衛。の。次。の。日。の。早。天。信。乃。現。八。並。直。元。逸。友。以。下。の。隊。長。諸。頭。人。相。別。れ。て。親
 雪。代。四。郎。直。塚。紀。二。六。漕。地。喜。勘。太。們。の。伴。當。夥。兵。及。政。本。孝。嗣。石。龜。次。園。太
 越。郷。三。四。的。寄。舎。五。郎。須。々。利。壇。五。郎。と。其。隊。の。兵。六。十。餘。名。と。り。て。名。馬。青。海
 波。小。ら。踏。り。洲。崎。の。陣。營。赴。く。昨。日。朝。洲。崎。の。夥。兵。兩。三。名。と。參。り。歸
 東。の。義。を。注。進。ま。せ。り。洲。崎。の。澳。の。勝。軍。既。朝。寧。主。の。口。中。中。り。る。家。を。れ。

今あらざる要る。と今番の路を貪らば先大川大田と訪を那里の勝軍の事の
 光景を尋問以て知りて西館へ稟上んそその日仍徳へ立寄りけり然るの時莊
 介小文吾只猶今井河原の柵に在り昨日肩持備杖朝經と二の精兵を測高陣
 へ急渡脚の使ふら起せ。閉戦全勝の夏並生口の文名を注進せり。且石濱の
 千重葉の老黨士卒の自瀬橋あるゆゆ知りて驚駭に怖る。と大なる。然ては這狐
 城を久く抱か。と主君の妻妾諸臣の宅眷と資財什物。各船に執業せ。城を
 棄て落亡けり。のをも風く河原の柵に在る者あり。と莊介小文吾ち笑ひて。我ら捉ら
 わねども井ヶ儘閑々野武士山賊の據るもあらん。と。隨即登桐山八郎良千。隊兵
 一千二百と分の授けて。亟石濱へ遣て。件の城を守せり。有徳。程。今日。知る大江
 親兵衛姥雪代四郎。政本大石龜次。團大越。卿。之。新附の野武士。三四の寄舎五
 郎。須々利。壇五郎。們を相伴ひて。國府。基。より。乘。り。れ。送。の。飲。ひ。さ。る。も。あ。り。身。を。柵。の。大

廳小賓主の席と設け。月屬會話。時の移る。と。覺。き。滿。呂。復。五。郎。再。大。郎。安。西
 就。大。樟。村。主。も。這。席。末。小。列。り。俱。飲。び。を。盡。し。め。り。當。下。莊。介。小。文。吾。の。次。團。大。お
 ろ。對。ひ。て。曩。小。稻。戸。津。衛。が。好。意。を。片。見。の。躲。処。を。脱。れ。去。り。時。足。下。の。宿。野。へ。ま
 して。報。知。せ。し。思。ひ。り。も。人。ふ。知。れ。ん。と。怕。れ。て。果。さ。り。た。と。う。ち。勸。解。れ。ば。又。次。團。大。郎
 三。の。毛。野。が。智。計。の。帮。助。を。再。生。さ。す。飲。び。を。便。宜。さ。り。今。番。を。う。る。時。至。り。て
 安。房。へ。赴。く。と。云。飲。び。を。告。る。と。ま。又。莊。介。小。文。吾。以。下。の。毎。の。孝。嗣。の。人。と。為。り。最。慕
 ぶ。思。ひ。て。其。管。待。大。江。姥。雪。を。異。多。く。又。親。兵。衛。を。昨。日。斃。れ。神。茶。の。原
 瀬。久。の。深。瘡。の。ゆ。ら。ん。と。他。も。刀。瘡。見。用。ひ。て。即。効。を。と。と。以。者。を。但。惜。む。く。戦。死
 せ。敵。自。家。の。士。卒。の。骸。骨。埋。め。り。神。茶。の。原。に。至。る。と。い。へ。も。其。死。を。起。さ
 こと。い。は。し。め。何。ぞ。か。幸。な。れ。意。亦。比。命。數。歇。り。飲。然。と。ま。業。報。る。と。云。主。客。の
 相。譚。以。順。る。時。滿。呂。再。大。郎。と。安。西。就。が。酌。を。執。て。盃。を。勸。る。程。日。景。既。亦。敬。に



八代傳九郎卷四下

十七



八代傳九郎卷四下

文溪堂主藏

去る親兵衛急小別を告て且同伴の衆人をいそがせり青海波の馬を牽
 せ今井河今又渡を船果て上總路投て立出けり然親兵衛が日の進止
 する待り安房の在る君と親とを討つて只其情義の故とて這頭小路草
 喫ける相応りと思ふ者もあらん其を知る人益這陸地二ヶ所の閉戦一
 箇も軍監る親兵衛の悄地の東辰相と商量あり且義通君の命を禀て其
 職と兼され異日軍功と媚む者の証言と防んを故意徳へ立たれん然
 去の小集の私の一所以の事亦是公事を既り陸地二ヶ所の軍談の
 事不説盡し是より又洲崎の澳る水戦の甚麼を分教あり赤碓河
 崎勢勿負焼弾艦艦有周郎を前板坂東將帥の像替の猶言
 知り欲さる又巻を改る且下回不説かるを聴ねかし

南總里見八代傳第九輯卷之四十二下終

